



バルブのイメージキャラクター
ばるちゃん

バルブ産業ビジョン

—日本ブランドの恒久的な地位確立を目指して—

第1期(平成19年度～平成22年度)

第2期(平成23年度～平成25年度)

第3期(平成26年度～平成28年度)

完了報告

平成29年3月

一般社団法人日本バルブ工業会

目 次

1. はじめに	1
2. 第1期計画～第3期計画の実施内容、及び、評価	1
3. 次期中長期活動計画「V2020」について	6
4. 第1期計画～第3期計画アクションプラン一覧.....	7
5. バルブ産業ビジョン策定に係る構成員名簿（第1期計画～第3期計画）	17

1. はじめに

経済産業省は平成 18 年、素形材産業のさらなる発展の方向性と 10 年後のあるべき姿を示すため、「素形材産業ビジョン」を策定した。同年には、素形材産業に属する各業種の団体もそれぞれのビジョンを掲げて続き、当工業会は少し遅れて平成 19 年 3 月に「パルプ産業ビジョン 2007」を公表した。

以降、当工業会では「パルプ産業ビジョン」に示した 10 年後のあるべき姿の実現を目標として様々な活動を進めてきたが、このビジョンに基づく活動計画は平成 28 年度をもって終了する。ここでは、過去 10 年間の活動を振り返り、出来たこと、出来なかったことを整理しながらビジョンの総括を行い、もって完了の報告とする。

2. 第 1 期計画～第 3 期計画の実施内容、及び、その評価

「パルプ産業ビジョン」は平成 19～22 年度を第 1 期、平成 23～25 年度を第 2 期、平成 26～28 年度を第 3 期として位置付け、10 年間の活動を行ってきた。

当初は期を区切ることは想定していなかったが、最初のビジョンを発行した翌年の平成 20 年にリーマンショックが起こり、社会情勢・経済情勢が大きく変化した。これを受け、経済産業省や他団体が各ビジョンの追補版を発行することとなり、当工業会も「パルプ産業ビジョン」追補版を平成 22 年度末に発行した。その際、今後も起こり得る情勢の変化に対応できる、より現実的な活動計画が必要であるとして 3 年ごとに計画を見直すこととなり、その結果、最初の 4 年を第 1 期、追補版でターゲットとした平成 23～25 年度を第 2 期として位置付けた次第である。

第 2 期、第 3 期ではそれぞれ新たにアクションプランを定め（あるいは前期から継続し）、これが計 10 年に渡る当工業会事業活動の柱となった。

個別のアクションプランは第 4 章に掲載している一覧を参照いただくこととし、本章では過去 10 年の各期において実施した主な事業の内容とその全体的な評価について述べる。

2-1. 第 1 期(平成 19～22 年度)

平成 19 年に発行した「パルプ産業ビジョン 2007」では 9 つの大きなテーマを設け、それぞれについて概略以下のような 10 年後のあるべき姿を提示した。

(1) 技術・技能を活かした攻めの経営

産業の基本的・中核的役割を担うものとしてパルプが認知され、パルプという言葉が「高度な制御系システム」を想起させる存在となっている。また、パルプに係る技術が体系的にまとめられ、技術伝承のための教育システムも整備されている。

(2) 健全な取引慣行の定着

素材メーカーと良好な関係を維持し、製品メーカーとも適正な価格によって相互に利潤を分かち合える関係を構築している。独禁法や下請法遵守が徹底され、取引ガイドラインが広く浸透している。

(3) 産業集積を活用した競争力強化

海外の低コスト品に対抗するため、同機能モジュールの標準化・共通化等の集積化が推進されている。部品関連業界との部材調達のためのネットワーク構築、業界内ネットワーク強化により、新材料、新技術、環境対策などの技術革新に対応できる仕組みができています。

(4) 積極的な海外戦略の展開

国内外のバルブ産業の現状が明確になっており、海外の情報(法律・規制等)を入手しにくい中小企業向けにサポート体制が構築されている。

(5) 同業/異業との積極的な連携

各社は競争力アップのために同業/異業との連携を積極的に行い、金属のみならず、ゴム・樹脂部品等に関する最先端技術を導入した製品作りが行われている。

(6) 多様なニーズへの挑戦

先方のニーズに沿うだけの製品供給に留まらず、先端的なバルブ技術を研究して提供している。研究開発は常に積極的に行われ、研究～製品化が新たな研究テーマを生む好循環にある。

(7) 息の長い人材育成

理系学生にとって魅力的な業界となっており、若手経営者・女性経営者の輩出も一般的になっている。雇用安定化とOB世代の活用により技術伝承が体系化され、長期的人材育成プログラムが完備されている。

(8) 安全・環境に配慮したバルブ産業の発展

環境に配慮した経営方針基準が明確になっていて、環境関連自主目標が策定され実行されている。また、環境配慮設計基準に基づくものづくりを行っている。

(9) バルブ産業に国民の目を振り向かせるために

バルブが産業の要となる高度な製品であるという理解が浸透し、学生の志願者も安定的に増大している。

ここで描いた10年後の将来像を実現すべく、当工業会は新たに広報委員会と国際委員会を設置し、既存の技術委員会、及び、全体を統括するビジョン委員会とあわせ、アクションプランを推進する体制を整えた。

この第1期においては、どのプランから実践するかの順位付けの明確化、また、どの組織が担当するかの明確化ができなかったこともあり、推進度合いは捗々しくない点もあったが、4年間で行ったことのうち、バルブの日(3月21日)の制定、イメージキャラクター「ばるちゃん」の誕生、「バルブ便覧」の40年ぶりの改訂が大きな成果として挙げられる。

その他、第1期計画全般に対する評価として、平成23年3月発行の追補版に記載した以下の内容を転記する。

(1) 技術・技能を活かした攻めの経営

前述の『バルブ便覧』の改訂のほかには、産学連携による新技術研究開発、規格・基準整備の組織作り、産業財産権研修を推進できた。

(2) 健全な取引慣行の定着

会員向けに法令遵守の広報活動を行ったほか、取引ガイドラインを作成した(現在、発行に向け内容を見直し中)。本分野のアクションプランの速やかな実施は、第2期計画における喫緊の課題である。

(3) 産業集積を活用した競争力強化

新技術研究開発プロジェクトを実施し、産学連携については一定の前進を見せた。その他のアク

ションプランは、より具体性のあるプランに修正の必要がある。

(4) 積極的な海外戦略の展開

海外への合同視察団派遣は毎年実施し、中国及びドイツのバルブ工業会、CEIR（欧州バルブ工業会）とのネットワークが構築できつつある。

(5) 同業/異業との積極的な連携

シール材メーカーを招き、ノンアスベストシール材の最新動向について意見交換を行うとともに、高温用ノンアスベストジョイントシートの選定指針を共同で策定した。今後も、バルブと近い業界との効果的な連携について検討を進めていく。

(6) 多様なニーズへの挑戦

上記(3)と同様、より具体的なプランを示したうえで実践に移す必要がある。

(7) 息の長い人材育成

若手社員を対象とした研修会は、毎年一定の成果を見せている。今後は、研修会の対象を若手以外にも広げ、カリキュラムも柔軟性のあるものにすることが求められる。また、技術の伝承については、即実施に移せるプランを再考する必要がある。

(8) 安全・環境に配慮したバルブ産業の発展

環境対応情報収集、「バルブ製品アセスメントガイドライン」の策定等、第1期において最も進捗をみせた分野である。第2期も引き続き、着実にアクションプランを実施することが必要である。

(9) バルブ産業に国民の目を振り向かせるために

「バルブの日」とイメージキャラクター「ばるちゃん」を制定した。これらを活用し、今後もよりいっそうバルブ産業をPRすることが求められる。

2-2. 第2期(平成23~25年度)

第1期の成果と反省、経済情勢や社会情勢の変化を踏まえ、第2期では抜本的な活動計画の見直しを行った。また、この第2期計画に向けた議論を進める矢先、当時会員だった一企業において品質管理体制に係る不祥事が発覚し、広くマスコミで報道される事態が発生した。これらを受け、第2期では「信頼され成長するバルブ産業へ」という新たなテーマを最初に置くこととし、あわせて、第1期で定めた9つのテーマを次のように7テーマに集約した。

第1期計画のテーマ構成

1. 技術、技能を活かした攻めの経営
2. 健全な取引慣行の定着
3. 産業集積を活用した競争力強化
4. 積極的な海外戦略の展開
5. 同業/異業との積極的な連携
6. 多様なニーズへの挑戦
7. 息の長い人材育成
8. 安全・環境に配慮したバルブ産業の発展
9. バルブ産業に国民の目を振り向かせるために



第2期計画のテーマ構成

1. 信頼され成長するバルブ産業へ
2. 技術、技能を活かした攻めの経営
3. 多様なニーズへの挑戦
4. 積極的なグローバル戦略の展開
5. 人財の確保と育成
6. 環境保全とビジネスの両立
7. バルブ産業の地位向上

この第2期では、個々のアクションプランの担当組織と3年間の活動スケジュールを事前に設定し、第1期より少しでも多くのプランを実施に移すことを目指した。CSR（企業の社会的責任）推進や広報に係るプランでは進捗を見せたが、情報収集に係るプランでは多岐に渡る会員ニーズを満たす策を見出せなかったことが反省として残った。

第2期計画全般に対する評価は、以下のとおりである（平成26年3月発行の第3期計画から抜粋）。

（1）信頼され成長するパルプ産業へ

この分野は、平成22年に当時会員だった一企業の不祥事が発覚したことから、第2期計画の開始にあたり新たに設けたものである。「CSR（企業の社会的責任）の推進」を活動の軸として、企業行動憲章や競争法コンプライアンス規程、個人情報保護方針などを制定し、また、これらテーマに関するセミナーを実施するなどした。この分野を設けるに至った経緯を忘れることなく、第3期も気を引き締めて、各プランを着実にこなしたい。

（2）技術、技能を活かした攻めの経営

ほとんどのアクションプランは第1期から継続しており、また第3期にも引き継がれる。第2期の新技術研究開発プロジェクトでは、パルプの環境適合設計推進、住宅用給湯システムの効率向上、有害物質規制の対応技術調査の実施を承認し、これらのプロジェクトは現在も継続中である。また、第2期にはJISとJV規格の制定・改正が多くあり、次の3か年に向けての改正準備もすでに進められている。

（3）多様なニーズへの挑戦

情報の収集と提供に取り組んだが、情報の質の面（その情報がいかに希少且つ正確であるか）で、多くの会員のニーズを満たすには様々な課題や困難があることが判明した。業界団体としてすべきこと、できることを整理し直す必要がある。

（4）積極的なグローバル戦略の展開

外部から専門家を講師に招き、コンスタントにセミナーを開催した。上記分野と同様、情報収集の面で課題が残った。

（5）人財の確保と育成

会員ニーズとのミスマッチにより、思うように進捗しなかったプランがあったことから、アンケート調査を通じて詳細にニーズを把握するところから始めた。その結果、当工業会では初めての、中堅人材を対象とした研修の実施に結びつき、受講者から好評を得ることができた。

（6）環境保全とビジネスの両立

環境適合設計推進のため、ガイドライン改訂、アセスメントツール開発、セミナー開催等々の活動を続けている。第3期ではこれまでの活動の集大成として、環境適合パルプ製品登録制度の開始を予定している。

（7）パルプ産業の地位向上

当初考えていたパルプ展示会の主催とは異なる形になったが、既存の展示会への出展を通じて、ユーザーや一般の方々向けにパルプ産業をPRした。また、平成23年に開始した「パルプフォト五七五コンテスト」は3回を重ね、新聞や雑誌にも取り上げられるなど認知度が向上した。

2-3. 第3期(平成26~28年度)

第2期計画策定時に整理し直した7つのテーマ区分を、第3期計画はそのまま受け継いでいる。したがって、第2期からの大きな変更はなかったものの、それまでの過去7年の活動を検証し、実施の具体案が乏しいプランやスケジュール面での見通しも立たないプラン、予算面で現実的ではないプランを排除し、個々をより具体的で実効性のあるものにすることに主眼を置いた。

第3期計画全般に対する評価は、以下のとおりである。

(1) 信頼され成長するパルプ産業へ

テーマ名「信頼され成長するパルプ産業へ」を工業会スローガンとして制定し、今後も活用していくこととした。第1期中に制作を進めていた「パルプ産業取引ガイドライン」は、パルプ産業ならではの事例(ベスト・プラクティス)を盛り込むことが叶わず、独自色を出せないとして、結局発行を見送った。

(2) 技術、技能を活かした攻めの経営

いずれのプランも前期から継続したものである。いくつかの規格改正を行ったが、審議・検討に3年を費やしてしまった感もあり、新たな事業実績を上げるには至らなかった。具体的且つ期限目標をもったプランの設定、それを実施する行動力が今後の課題である。

(3) 多様なニーズへの挑戦

技術研修会は毎年様々なテーマで多数の参加者を集め、これは今後も継続していく予定である。研修やセミナーという形態以外での会員向け情報発信については進捗がなく、課題が残った。「多様なニーズへの挑戦」は第1期から掲げており、当初はユーザーからのニーズに応えることを目的としていたが、途中からテーマがぼやけてしまった。

(4) 積極的なグローバル戦略の展開

大多数のパルプメーカーは、建築、電力、工業、住設等、それぞれの得意分野に特化しており、用途が異なれば互いに異業種メーカーとも思えるほどに、各社のニーズは様々に異なっている。そうした個々のメーカーが集まり国際委員会を構成したが、かえって会員の要求を正確に把握し、それに応えることが難しくなってしまった。いくつか有益なセミナーを開催し会員への情報提供に貢献したものの、今後の活動の道筋が見えなかったことから、平成28年3月をもって国際委員会は解散となった。今後は、ニーズが近い者同士が集まる部会や、共通の活動目的をもった委員会単位で、具体的なグローバル戦略を検討するようにしたい。

(5) 人財の確保と育成

第2期に開始した中堅人財向けの研修を、その内容を抜本的に見直しつつ、継続開催できた。若手向けの研修会とあわせ、今後もさらなる改善を加えながら継続していきたい。人財確保への対策としては、平成28年10月に広報委員会で滋賀県立大学院生との意見交換会を実施した。これも今後の継続が重要である。

(6) 環境保全とビジネスの両立

平成28年11月から、独自の環境ラベルである「環境配慮パルプ登録制度」を開始することができた。「パルプ産業ビジョン2007」で掲げた10年後の姿を、最も良く体現できた分野と言えよう。但し、ラベル制度の周知普及が進んでいないため、これは次の活動計画において着実に進めていかなければならない。

(7) パルプ産業の地位向上

展示会への出展、パルプフォト五七五コンテストの開催、「ばるちゃん」グッズの制作を継続し、主に一般向けの PR 活動に努めたほか、上述のとおり「人財の確保と育成」のテーマでは、大学院生との交流も行った。今後は、第2期に行った学生懸賞論文コンテストのように、人財確保に効果が見込まれる学生向け PR に重点をシフトしていく予定である。

2-4. 第1期～第3期のまとめ

以上見てきたように、パルプ産業ビジョンに基づくこの10年間の活動では、当初行おうとしていたものの出来なかったことが多々あり、目標を達成できたとは言い難い。特にテーマによって、比較的多くのアクションプランに取り組めたもの、そうでなかったものの差が大きいに思われる。これは今後の活動計画を立てる上での反省材料にすべき点である。

しかしながら、こうして様々な活動に取り組まなければ上げられなかった成果も多々あり、それによって見えてきたものもある。少なくとも今後目指すべき方向性はビジョン策定前よりも明確になっている。その一点だけを見ても、10年間ビジョンに取り組んだ意義は大きい。ビジョンでの活動に対する満足度が現時点では高くないとしても、それを土台としてこれからの活動をより有意義に展開していければ、そうした評価は変わっていくものであろう。「10年後のあるべき姿」には間に合わなかったが、本当の成果が現れてくるのはこれからと言ってよいのかもしれない。

当工業会では、平成29年度から新しい組織体制を敷くこととしており、ビジョンの活動で得られた成果と反省点を受け継ぎつつ、次なる活動計画の策定に向けてすでに動き始めているところである。

3. 次期中長期活動計画「V2020」について

当工業会では、「パルプ産業ビジョン」に続く中長期の活動計画として、東京五輪が開催される2020年をひとつのターゲットとする計画「V2020」を策定するため、現在各委員会での話し合いを進めている。

ここでは、取り組むべきことは何か、取り組む目的は何か、目的達成のための方策は何か、を分かりやすく整理し、重点施策とその実行責任組織を明確にすることを基本方針としている。「パルプ産業ビジョン」でアクションプランを少し盛り込みすぎてしまった反省を生かし、本当に必要なプランのみに絞った、もっとシンプルなものとする予定である。

「V2020」は、2020年までの活動計画ではあるが、それまでにすべてを完結させ、成果を求めるという類のものでもない。もちろん、そうすべきアクションプランも含まれてはくるだろうが、2020年以降も見据えた上での基礎作りの性格を持つプランも含まれてくるはずである。

「V2020」は、2017年秋までに策定し、本格的な活動を開始する予定としている。

4. バルブ産業ビジョン第1期～第3期の全アクションプラン

4-1. 第1計画(平成19～22年度)アクションプラン

1. 技術、技能を活かした攻めの経営

課題／実施内容	実施項目
自社の技術技能を正確に評価する取組み	工業会内の技術交流推進と業界技術マップ作成の基盤作り
	産学官バルブ技術ネットワーク構築
技術技能を活用して、収益につなげる取組み	産官学によるバルブ新技術研究開発の推進
	規格基準整備の組織作り
	JIS規格の国際化推進
産業資産経営の取組み	産業財産権研修推進
バルブ技術の体系化	バルブ便覧の改訂

【評価】 『バルブ便覧』の改訂のほかには、産学連携による新技術研究開発、規格・基準整備の組織作り、産業財産権研修を推進できた。

2. 健全な取引慣行の定着

課題／実施内容	実施項目
産業財産を正當に扱う取引慣行	法令遵守の広報活動推進
下請け代金法の遵守	取引ガイドラインの策定

【評価】 『会員向けに法令遵守の広報活動を行ったほか、取引ガイドラインを作成した(現在、発行に向け内容を見直し中)。本分野のアクションプランの速やかな実施は、第2期計画における喫緊の課題である。

3. 産業集積を活用した競争力強化

課題／実施内容	実施項目
産業集積のメリットと限界	業界標準化・共通化の枠組み検討
産業クラスター計画の推進	産官学関連業界とのネットワーク構築
資材供給の安定化	レアメタルの備蓄促進
	代替材料の開発促進

【評価】 『新技術研究開発プロジェクトを実施し、産学連携については一定の前進を見た。その他のアクションプランは、より具体性のあるプランに修正の必要がある。

4. 積極的な海外戦略の展開

課題／実施内容	実施項目
日本のバルブ産業の強み、弱みを評価する仕組み	業界の技術・海外の技術・ユーザーの技術水準、ベンチマークと情報発信
海外バルブ産業の能力を把握する取組	合同調査団派遣
	海外バルブ産業情報入手の仕組み作り
国際分業体制の構築	基本契約案検討・公開
海外進出に関する情報収集および情報提供(グローバルネットワークの構築)	各国の法規データベースの構築
	法規・規制・制約などの勉強会・講習会の開催
技術流出防止と海外展開での収益確保	技術流出防止策の充実
	産業財産権保護の国家間交渉の推進

【評価】 海外への合同視察団派遣は毎年実施し、中国及びドイツのバルブ工業会、CEIR(欧州バルブ工業会)とのネットワークが構築できつつある。

5. 同業／異業との積極的な連携

課題／実施内容	実施項目
企業間連携による競争力の強化	技術交流会・異業種交流会の開催
連携体としてのシナジー効果を出す方法と M&A 等により企業組織拡大の方法の使い分け	連携モデルケースの紹介
バルブ産業に必要な技術分野との連携	異業種との交流・連携（勉強会の開催など）

【評価】 シール材メーカーを招き、ノンアスベストシール材の最新動向について意見交換を行うとともに、高温用ノンアスベストジョイントシートの選定指針を共同で策定した。今後も、バルブと近い業界との効果的な連携について検討を進めてゆく。

6. 多様なニーズへの挑戦

課題／実施内容	実施項目
自社技術の更なる向上	---
成長が見込まれる新産業分野への供給能力の向上	業界の技術・海外の技術・ユーザーの技術水準、ベンチマークと情報発信

【評価】 3 と同様、より具体的なプランを示したうえで実践に移す必要がある。

7. 息の長い人材育成

課題／実施内容	実施項目
人材不足の対応	研修会の開催
	研修制度の改善・要望
就労環境の改革	学との連携
	5S ルール・安全職場構築
技術の伝承	マイスター制度検討・導入
PR 活動	見学会開催要領の検討

【評価】 若手社員を対象とした研修会は、毎年一定の成果を見せている。今後は、研修会の対象を若手以外にも広げ、カリキュラムも柔軟性のあるものにすることが求められる。また、技術の伝承については、即実施に移せるプランを再考する必要がある。

8. 安全・環境に配慮したバルブ産業の発展

課題／実施内容	実施項目
ものづくりの基準作り	環境対応技術情報収集
	検討・ガイドラインの策定
	調査・準備～継続的な対応
環境配慮への統一性	調査・検討
	工業会としての目標作成・環境報告書作り
資源活用	調査・検討

【評価】 環境対応情報収集、ガイドラインの策定等、第 1 期において最も進捗をみせた分野である。第 2 期も引き続き、着実にアクションプランを実施することが必要である。

9. バルブ産業に国民の目を振り向かせるために

課題／実施内容	実施項目
---	ガイドラインの設定・運用
	バルブ産業の PR 活動
	地域とのコミュニケーション活動
	「バルブの日」イベント
	産官学共同のバルブ産業向上活動

【評価】 「バルブの日」とイメージキャラクター「ばるちゃん」を制定した。これらを活用し、今後もよりいっそうバルブ産業を PR することが求められる。

4-2. 第2計画(平成23~25年度)アクションプラン

1. 信頼され成長するバルブ産業へ

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価/達成度	
CSR (企業の社会的責任) の推進	企業行動憲章の策定	ビジョン	早期策定と周知啓発	H24年5月に制定	ほかに個人情報保護方針、競争法コンプライアンス規程も制定した。	
	CSR 推進のための定期的な研修会・講習会の開催		講習会開催と継続	①H23年、弁護士と会員企業経営者を講師とするセミナー開催 ②H24年、BCP促進セミナー開催	計画通り実施できた。	
品質管理体制の徹底	会員企業の「製品安全自主行動計画」策定の促進		会員向け説明会の開催と継続	---	研修の開催を検討したが、個別具体的なテーマが挙がらなかった。	
社会貢献	募金活動 (会員対象)		担当組織の設置と活動開始	H23年5月、東日本大震災への義援金679万円を寄付。	---	会員が個々に支援活動を行っていることから、工業会として組織を設けるまでには至らなかった。
	災害時の支援活動					
適正取引慣行の推進	独禁法・下請け代金法順守の広報活動推進	①取引ガイドラインの改訂 ②周知啓発活動	---	具体的活動はなく第3期に持越し。		

2. 技術、技能を活かした攻めの経営

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価/達成度
自社の技術技能を正確に評価する取組み	ホームページでの会員企業の技術紹介	技術	技術情報募集開始及び公開	H23年「会員企業の技術・製品情報」をHPに公開、25年には23社に増加。	HP公開は実施できたが、23社から増加していない。
技術、技能、規格等を活用して、収益につなげる取組み	官学産社によるバルブ新技術研究開発の推進		新技術研究開発プロジェクト継続	節湯型機器のJIS規格化、有害物質規制の対応技術調査ほか4テーマ承認	予算との兼ね合いで今後の展開に懸念。
	規格・基準整備		運営体制の確立 (技術委が統轄)	規格制定への手続き停滞要因を明確にし、手続きプロセスに復活させて7規格制定。	規格改正の動向を監視し積極的に関与している。
	JIS規格等の国際化推進		JIS規格等の国際化推進と継続	各標準化委員会にて推進。	各標準化委員会を着実に推進。
産業資産経営の取組み	産業財産権保護への取組み		研究会開催、模倣品・特許侵害調査	国際標準化と知的財産戦略についての講演開催 (経産省)。	第2期で終了
バルブ技術の体系化	新版バルブ便覧の改訂	①「新版バルブ便覧」の普及推進 ②次期改訂WG設置、見直し開始	①若手社員研修会のテキストとして使用開始。 ②次期大幅改訂の目処を2020年に設定。	「新版バルブ便覧」を若手社員研修会のテキストとして使用することは定着した。	
	バルブ設計データブック改訂の検討	①改訂の方向性の検討 ②WG設置/改訂内容の検討	改訂へのアンケート実施⇒改訂しないことに決定。	第2期で終了。改訂しない。	

3. 多様なニーズへの挑戦

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
業界標準化・共通化の枠組み検討	交換部品・メンテナンス部品の寸法・形状の統一	各部会	水栓部会で検討	長期使用住宅部材標準化推進協議会（長住協）と交換部品や寸法について統一できるものがあるかの協議を重ねた。	寸法・形状を統一した部品はないが、ターゲットとする部品等の洗い出しを行い、現在も協議を継続している。
資材調達の安定化	代替材料の開発促進	技術	情報収集	日本機械工業連合会が発行する代替材料に関する調査研究報告書を活用、Webを監視する。	情報の配信なし。
企業間連携による競争力の強化／バルブ産業に必要な技術分野との連携	技術交流会・異業種交流会の開催(勉強会の開催など)		従来の技術研修会継続（具体的テーマの検討・実施）、会員ニーズの調査	技術研修会を毎年実施。	テーマ選定に苦慮する面はあるが毎回40名以上の参加を得ている。
国内外の技術・市場の技術情報調査	調査チーム設置	ビジョン	調査チーム設置及び活動開始	会員の海外認証取得状況、国内外の展示会一覧等を会員専用HPに掲載。	情報の共有やレアな情報の収集には課題が多く、チーム活動停止。

4. 積極的なグローバル戦略の展開

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
海外バルブ産業の能力を把握する取組み	調査団派遣	—	会員ニーズ別に調査団派遣	H24年、水栓部会で中国視察実施	上海で開催されたキッチン・バスチャイナ（展示会）及び現地の関連メーカーの視察を実施し、報告書を取りまとめバルブ技報にて発表した。
	海外主要国のバルブ工業会等を通じた関連情報入手	国際	海外視察時に現地のバルブ工業会と意見交換	---	第2期は工業会全体としての海外視察はなかった。
海外進出に関する情報収集および情報提供	ASEAN各国での素材調達の状況把握		鑄造、鍛造協会との関係強化を図り情報収集	H25年、日本鍛造協会、日本鑄造協会を講師に招き、セミナー開催	セミナーには多数の参加者を集めた。調査や情報収集の面では課題が残り、本実施項目は第3期に継続させた。
	鑄造、鍛造、部品(シール部品、ねじ等)の海外での入手先の調査		市場動向にあわせ、国を選定し認証や規制を調査	---	着手に至らず。
	各国の法規、認証等の情報収集		調査状況に併せてJETROや政府系機関から講師を招き講習会開催	---	着手に至らず。
	法規、認証等に関する勉強会・講習会の開催		講演依頼等準備	---	テーマに相応しい講師を見つけられなかった。
国際協業（FTA・EPA・TPP）についての把握	欧州バルブ産業先発国の産業史に関する講演会		JETRO等の機関にて調査	物流会社を講師に招き、ASEAN圏の貿易障壁、関税に関する講演会を実施。	本項目もセミナーの実施に留まり、調査や情報収集には至らなかった。
	ASEAN諸国、環太平洋諸国との貿易協定の調査	国際共創の実態把握			

5. 人材の確保と育成

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
人材不足の対応	大学就職部との連携	ビジョン	ネットワーク作り	---	着手に至らず。
	工業会 HP への会員求人情報（外国人含む）掲載		求人ページの開設準備／実施	求人情報を募集したが、掲載申し込みはなかった	会員ニーズを把握しきれていなかった。
	外国人の確保と育成		外国人採用に関する調査	厚労省の協力を得ながら留学生向け面接会開催を目指したが最終的に実現できなかった	第3期ではアクションプランから削除。
就労環境の改革	高度化技術の導入	-	会員向け情報提供	---	高度化技術導入のための具体策を立てられず、労働安全への各社対応状況の調査もできなかった。
	5S ルール・安全職場構築（各社対応）		引き続き各社で対応		
技術、技能、マインドの伝承	研修会の開催	技術	従来若手研修会の継続とカリキュラム見直し	講義テキスト改訂、環境関連の講義を追加	毎年定員40名枠が埋まる盛況で、会員企業の期待も高い。
	マイスター制度検討・導入	ビジョン	WG 設置・検討	①人材育成に対する会員ニーズの調査実施 ②H25 年、「次世代リーダー育成研修」開催	当初目的とは異なる形ではあるが、中堅社員向けの新しい研修を開始できた。
	テクニカルカレッジの創設				
研修制度・表彰制度の在り方の見直し					

6. 環境保全とビジネスの両立

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
ものづくりの基準作り	ガイドラインの策定	技術	①「パルプ製品アセスメントガイドライン」運用 ②自社製品環境適合評価ツール運用 ③工業会評価基準の検討 ④「グリーンパルプ（仮称）」制度の導入	①H23 年 3 月の第 1 版発行に続き、H25 年 4 月に第 2 版発行 ②ツール制作継続するも運用には至らず ③検討実施 ④制度導入に向けた検討開始	環境 WG 所属企業を対象にアセスメントトライアルを実施するなど、「環境配慮パルプ登録制度」導入に向けた準備を進めた。
	環境対応技術情報収集・提供		①セミナー開催 ②HP での情報提供	①欧州の環境規制、環境配慮設計推進のためのセミナー開催 ②従来から継続	第 2 期間中のセミナー開催は 2 回のみだった。もう少し増やしたい。
環境適合経営の統一性	工業会環境方針の制定（パルプ・水栓に限定せず）		①環境方針内容の検討 ②工業会環境報告書発行	---	パルプ産業全体をカバーする環境報告書発行は難しい。
3R の推進	Reduce（資源の削減）、Reuse（資源の繰返し利用）、Recycle（資源の再利用）		会員企業への啓発活動	---	ガイドラインで 3R 推進等に関する指針を示したが、個別の実績は特になし。
CO ₂ 排出削減の推進	会員への啓発活動推進（政府の支援策等活用）				

7. バルブ産業の地位向上

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
バルブ産業の PR 活動	ホームページの拡充	広報	従来に引き続き推進	「会員企業の製品・技術情報」ほかコンテンツ追加	大幅な拡充はできなかった。
	PR グッズの拡充		①従来に引き続き推進 ②会員ニーズの調査	ぬいぐるみ、ストラップほか新グッズ制作	展示会出展時、来場者に配布し、評を得た。
	その他 PR 活動		PR 案の検討と実施	①日刊工業新聞ほか専門紙・業界紙で「バルブの日」特集を展開。 ②H23年「バルブフォト五七五コンテスト」開始	実績①②とも、継続的に実施できている。特に②は一般の方にもバルブに関心を持っていただける
地域とのコミュニケーション活動	地域の学生向け講習会の実施	広報	会員による講習会開催	---	着手に至らず。
「バルブの日」のイベントの実施	バルブ展示会の開催		展示会実行委設置／準備	自前の展示会開催ではなく、既存展示会を利用した PR に方針転換。管工機材・設備総合展等に出展。	いずれの展示会でも期間中 1000 人を超える方にブースを訪れていただくことができた。
	大学生対象の懸賞論文募集		①論文審査組織の立ち上げ ②募集開始 ③バルブの日に入選者発表	計画どおり実施。24 名からの応募を得た。	いずれの論文も力作揃いで、将来的には継続開催したいところ。但し、開催周知のための教育機関とのパイプ作りは今後の課題。
官学産社共同のバルブ産業地位向上活動	バルブ工学会設立の基盤づくり	技術	情報収集／学会設立要件等確認と WG 設置	WG 活動開始。学会設立要件の調査のほか、大学を訪問し研究者との意見交換実施。	研究者の自発的意思によるべき学会や研究会の設立を、工業会事業として進めることの難しさが露呈。明確なロードマップを示せないまま第 3 期に課題を持越した。
	各地の大学での寄附講座開催	広報	情報収集／講座開催要件等確認後、講座開設	寄付講座開催に向けた調査を行ったが、予算面で断念。	学生向けの広報策検討は第 3 期の課題とした

4-3. 第3計画(平成26~28年度)アクションプラン

1. 信頼され成長するバルブ産業へ

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価/達成度
CSR(企業の社会的責任)の推進	コンプライアンスの徹底	ビジョン	①スローガン制定と周知 ②研修会開催	①H28年3月、スローガン「信頼され成長するバルブ産業へ」を制定 ②H29年3月バルブの日新聞広告企画でスローガン使用	研修会の開催は、スローガンの周知とあわせ今後の課題。なお、本項目を設ける理由となった会員企業によるコンプライアンス違反(H20年)は、その後発生していない。
	品質管理体制の強化		会員向け説明会の開催	---	課題の絞り込みができず、研修テーマの具体案が固まらなかった。
	社会貢献		①会員の地域貢献・社会貢献促進 ②迅速な災害対応のためのBCP促進	---	BCPに関するセミナーは第2期に開催。その後の展開を目論んだが、具体策に乏しかった。
	適正取引慣行の推進		①取引ガイドライン改訂作業開始 ②バルブ売買取引契約モデル約款改正検討	①H28年、素形材産業取引ガイドラインに関する説明会開催 ②検討の結果、ガイドライン、モデル約款ともに改訂しないことを決定	業界統一的な約款の制作はコンプライアンスの面で難しい。今後は公的機関によるセミナーやガイドラインの活用が現実的。

2. 技術、技能を活かした攻めの経営

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価/達成度
自社の技術技能を正確に評価する取組み	ホームページでの会員企業の技術紹介	技術	技術情報募集、掲載の継続	募集・掲載ともに継続	HP公開は実施できたが、23社から増加していない。
技術、技能、規格等を活用して、収益につなげる取組み	官学産社によるバルブ新技術研究開発の推進		新技術研究開発プロジェクト継続	1テーマ(ディスク式安全弁の放出挙動に関する研究)承認。	予算との兼ね合いで今後の展開に懸念。
	規格・基準整備		運営体制の確立(技術委が統轄)	①JV-3(バルブユーザガイド)改正 ②JIS B2031とB2051の追補制定 ③国交省公共建築工事標準仕様書28年版改訂2次案の意見提出 ④日本機械学会のJIS定期見直しへの委員派遣(B1217、B2404)	規格改正の動向を監視し積極的に関与している。
	JIS規格等の国際化推進		JIS規格等の国際化推進と継続	各標準化委員会にて推進。	各標準化委員会にて着実に推進している。
バルブ技術の体系化	新版バルブ便覧の改訂		①2015年の増刷及び2020年の改訂に向けての準備 ②誤植修正版の増刷 ③改訂WG設置の検討開始	誤植修正版増刷の準備完了。	「新版バルブ便覧」を若手社員研修会のテキストとして使用することは定着した。

3. 多様なニーズへの挑戦

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
資材調達安定化	代替材料の開発促進	技術	情報収集	日本機械工業連合会が発行する代替材料に関する調査研究報告書を活用、Webを監視する。	情報の配信なし。
企業間連携による競争力の強化／バルブ産業に必要な技術分野との連携	技術交流会・異業種交流会の開催(勉強会の開催など)		①従来の技術研修会継続(具体的テーマの検討・実施) ②会員ニーズの調査 ③ユーザー向け講習会開催(事故防止・メンテナンス等)	次のテーマで技術研修会開催。 ①ものづくり支援ツール ②水素エネルギー ③QFD+TRIZ+TMの連携活用	テーマ選定に苦慮する面はあるが、毎回40名以上の参加を得ている。
会員向け情報提供の強化	バルブに係る情報の収集と発信	ビジョン	会員向けメールマガジンの発行	メールマガジンの形態はとらなかつたが、情報発信実施。	H28年からは国際委員会活動停止に伴い、他団体主催セミナー等の情報発信も強化。

4. 積極的なグローバル戦略の展開

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
海外バルブ産業の能力を把握する取組み	調査団派遣	—	会員ニーズ別に調査団派遣	---	水栓部会がベトナム視察を企画したが、参加申込が少なく中止。
	海外主要国のバルブ工業会が持つ、オープンできる統計数値の情報交換	国際	海外のバルブ工業会との窓口確認など体制作り	米独等に資料を送るなどしてコンタクトを試みたが返信なし	相手側にニーズがなかった。
海外進出に関する情報収集および情報提供	ASEAN や開発国の材料や部品調達方法、加工技術に関する調査		①鍛造及び鋳造協会、関係企業より講師を招き、講演会を開催 ②会員企業から海外の購入先を確認し、情報を共有	---	過去に同じテーマで開催した講演は、次の開催時に前回の内容を上回る必要があり、企画が難しい。材料調達に関する情報共有はどの会員も開示が難しく、模倣品被害調査については、これを求める声以前ほどではなくなっていた。本分野については、様々に異なる会員の要求に応える方策を工業会として打ち出すことが難しく、国際委員会はH28年3月に活動を停止した。
	会員企業が知りたい国の法規・認証・規格等に関する情報収集及び講習会開催		認証機関から講師を招き、講習会開催	---	
	産業財産権保護への取組み		①研修会開催 ②模倣品・特許侵害調査	---	
国際事情についてのセミナー開催	従来に引き続き推進		H27年、セミナー「海外進出のA to Z」開催	---	
国際協業(FTA・EPA・TPP)についての把握	ASEAN、環太平洋諸国との貿易協定に関する情報収集	物流業界、商社から講師を招き、講習会開催	---		
安全保障貿易管理の推進	安全保障貿易管理説明会の開催		経済産業省から講師を招き、講習会開催	安全保障貿易管理説明会は毎年開催。より専門的な内容のセミナー開催のためCISTECに協力依頼	今後はバルブに係る政省令に特化した講習会が必要。

5. 人財の確保と育成

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
人財不足への対応	学生向け PR 活動	広報	①大学等への出前授業 ②地域の学生向け講習会開催の準備	①HP に学生・一般向けコンテンツを掲載する方針に変更。H29 年 6 月、HP リニューアル（予定）。 ②H28 年、滋賀県立大学で大学院生との意見交換会開催。	大学院生との意見交換を通じ、今後の広報活動展開のヒントを得た。HP のリニューアルにもこの経験が生かされている。
就労環境の改革	高度化技術の導入のための講習会開催	ビジョン	開催準備	---	着手に至らず。
技術、技能、マインドの伝承	若手研修会	技術	従来若手研修会の継続とカリキュラム見直し	①見学会の実施とりやめ。 ②便覧持参者の受講料割引を実施。	毎年定員 40 名枠が埋まる盛況で、会員企業の期待も高いものと窺える。
	次世代リーダー育成研修	ビジョン	カリキュラム見直し	①H26 年、第 2 回目の研修実施。 ②H27 年、応募者数減により開催中止。次年度以降に向け研修内容を抜本的に見直し。 ③H28 年 11 月、工場見学やベテランによる講演を軸とする「次世代育成研修」開催	講師を外部委託していた「次世代リーダー育成研修」は受講者からの評判は良かったが、受講費の高さ等により開催を継続できなかった。リニューアルした「次世代育成研修」では、会員企業の工場見学を実施することで、参加者も多数集まり、満足度も高い研修となった。
	ものづくりマイスターや OB を活用した勉強会		勉強会開催	人財育成に関するアンケート調査を行うなどして、上記「次世代育成研修」の開催につなげた。	
	その他、会員ニーズに沿う人財育成事業		①会員ニーズの分析 ②事業内容検討 ③ニーズに基づく事業の実施		

6. 環境保全とビジネスの両立

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
ものづくりの基準作り	製品アセスメントの推進	技術	①ガイドラインの改訂検討 ②環境適合バルブ製品登録制度トライアル結果の検証 ③登録制度スタート ④内外に向けた PR 活動	①H28 年、ガイドライン第 3 版発行 ②会員協力のもとトライアル実施 ③ラベルマーク公募、Web 版チェックシート制作を経て、H28 年 11 月、環境配慮バルブ登録制度開始	バルブ産業全体で環境配慮設計を進めるという「バルブ産業ビジョン 2007」の当初目標を達成できた。今後も周知普及に努める。
	環境適合設計推進のための会員向け情報提供・啓発活動		①セミナー開催 ②会員向け提供情報の拡充	①環境配慮バルブ登録制度に関する会員向け説明会実施 ②H28 年、chemSHERPA と化学物質管理に関するセミナー開催	制度の説明会は H26～28 年に計 7 回開催。制度とは別のテーマに関する説明会も今後は増やしたい。
	バルブ産業の環境への取組みに関する PR 情報発信		①HP での情報発信手法の見直し ②会員企業による環境保全活動の紹介	①情報発信手法は従来どおりとした。 ②着手に至らず	HP の連載「環境関連情報」は継続。会員の環境保全活動紹介は、環境配慮バルブ登録制度の周知普及とあわせて今後展開したい。

7. バルブ産業の地位向上

実施内容	実施項目	担当	計画	実績	評価／達成度
バルブ産業の PR 活動	バルブの日のイベント実施	広報	新聞等メディアでの PR 方法の見直し	①日刊工業新聞紙上で毎年バルブの日特集を展開 ②H28年3月、日本経済新聞のバルブ特集に会長インタビュー掲載(H29年も)	専門紙での「バルブの日」特集では、多くの識者と対談を実施。そこでいただいた提言を工業会の事業活動にも反映し始めている。
	「ばるちゃん」の認知度向上		グッズ拡充	H26年、着ぐるみ制作。H28年、ミニチュアフィギュア制作。	「ばるちゃん」への興味をバルブ製品・産業への興味に繋げることが今後の課題。
	展示会等イベントでの PR 活動		①参加するイベントの再考 ②展示内容再考	従来に続き、会員企業と同時出展の形でバルブ産業の PR を行った。	着ぐるみを登場させるなどし、ブース訪問者数を増やすことができた。
	一般向け広報活動		①バルブフォト五七五コンテストの応募者増 ②ホームページ拡充	①H28年、第6回バルブフォト五七五コンテスト開催。応募作品数は過去最高を記録。 ②HPリニューアル開始。バルブの構造を分かりやすく見せるための動的コンテンツ制作着手。	バルブフォト五七五コンテストでは、自宅、近所、職場に身近にあるバルブに目を向けてもらうきっかけを作ることができた。
官学産社共同のバルブ産業地位向上活動	バルブ学会の設立	技術	①シンポジウム開催 ②その他、学会設立に必要な活動	①準備を進めたがシンポジウム開催には至らず。 ②研究会設立に向け、研究者と意見交換するも、設立は断念。	工業会事業としての将来的展望が見えず WG 解散。

5. バルブ産業ビジョン策定に係る構成員名簿

5-1. 第1計画(平成19~22年度)

敬称略・順不同、社名等は平成19年3月当時のもの。

運営委員会

委員長	大山 忠一	光陽産業(株)	代表取締役社長
委員	中村 善典	金子産業(株)	代表取締役社長
"	北村 和弘	(株)K V K	代表取締役社長
"	奥村 清一	(株)オーケーエム	代表取締役会長
"	田淵 宏政	(株)タブチ	代表取締役社長
"	松尾 秀孝	(株)キッツ	常務執行役員
"	横山 巖	東工・バレックス(株)	代表取締役社長
"	濱崎 雅幸	東陶機器(株)	商品技術部東部統括部長
"	五味知佳士	(株)キッツ	開発室長
"	河合 真	(株)山武	AAC 湘南担当統括部長
"	藤島 建夫	フシマン(株)	代表取締役社長
"	水谷 直義	ミズタニバルブ工業(株)	代表取締役社長
"	中川 哲	(株)昭和バルブ製作所	代表取締役社長
"	中村 政弘	オーエヌ工業(株)	代表取締役社長
"	比企 諭	(社)日本バルブ工業会	専務理事

経営ワーキンググループ

リーダー	中村 善典	金子産業(株)	代表取締役社長
委員	岡安 直人	岡バルブ製造(株)	代表取締役社長
"	横山 達也	東工・バレックス(株)	常務取締役
"	藤島 建夫	フシマン(株)	代表取締役社長
"	落合 潔	兼工業(株)	代表取締役社長
"	前田 康雄	前田バルブ工業(株)	代表取締役社長
"	中川 哲	(株)昭和バルブ製作所	代表取締役社長
"	濱口 浩一	宮部鉄工(株)	代表取締役社長
"	中村 政弘	オーエヌ工業(株)	代表取締役社長
"	西岡 利明	(株)三栄水栓製作所	代表取締役社長

技術ワーキンググループ

リーダー	五味知佳士	(株)キッツ	開発室長
委員	橋岡 由男	(株)キッツ	技術本部開発4部部長
"	渡辺 正春	(株)キッツ	開発室主任技師
"	清水 文泰	東洋バルブ(株)	営業技術サービスセンター長
"	木村 彰男	(株)クボタ	バルブ技術開発部長
"	佐藤 俊雄	岡野バルブ製造(株)	技術グループ長

技術ワーキンググループ(続き)

委員	鈴木 弘一	(株)ベン	技術部長
"	岡本 雅克	(株)ティエルバイ	設計部ジェネラルマネージャー
"	奥津 良之	(株)山武	開発3部マーケティング Gr. シニアマネージャー
"	石川 和夫	(株)タブチ	商品開発本部長
"	島 正昭	東陶機器(株)	水栓技術部長

5-2. 第2計画(平成23~25年度)

敬称略・順不同、社名等は平成23年3月当時のもの。

ビジョン委員会

委員長	中村 善典	金子産業(株)	代表取締役社長
委員	岡安 直人	岡バルブ製造(株)	代表取締役社長
"	横山 達也	東工・バレックス(株)	代表取締役社長
"	藤島 建夫	フシマン(株)	代表取締役社長
"	落合 潔	兼工業(株)	代表取締役社長
"	前田 康雄	前田バルブ工業(株)	代表取締役社長
"	中川 哲	(株)昭和バルブ製作所	代表取締役社長
"	濱口 浩一	宮部鉄工(株)	代表取締役社長
"	中村 政弘	オーエヌ工業(株)	代表取締役社長
"	西岡 利明	(株)三栄水栓製作所	代表取締役社長

技術委員会

リーダー	橋岡 由男	(株)キッツ	バルブ事業部技術本部給装 Gr. 主任技師
顧問	五味知佳士	(株)キッツ	技術本部主席技師
委員	浅井 修	(株)キッツ	技術本部技術部長
"	清水 文泰	東洋バルブ(株)	営業技術サービスセンター センター長
"	蓬萊 章伸	(株)クボタ	バルブ技術開発部開発管理グループ長
"	後藤 秀樹	栗本商事(株)	品質保証部長
"	佐藤 俊雄	岡野バルブ製造(株)	取締役 技術統括部長
"	鈴木 弘一	(株)ベン	執行役員 技術部 部長
"	岡本 雅克	(株)ティエルバイ	取締役 設計部ジェネラルマネージャー
"	奥津 良之	(株)山武	AAC 営業技術部 FI/CV Gr. シニアマネージャー
"	河本 理之	TOTO(株)	水栓技術センター水栓商品技術開発 Gr. リーダー

技術委員会環境 WG

主査	浅井 修	(株)キッツ	技術本部技術部長
委員	石黒 文康	(株)INAX	総合技術研究所材料技術開発室 Gr. リーダー
"	桶川 智也	(株)タブチ	RDユニット主席技師
"	砥川 裕行	TOTO(株)	水栓技術部水栓評価技術 Gr. グループリーダー
"	中島 一彰	(株)三栄水栓製作所	製造本部技術課 課長

技術委員会環境 WG(続き)

〃	樋口 敏夫	日立バルブ(株)	開発センター主任技師
〃	福本 丈登	(株)ティエルバイ	設計部技術管理 Gr. シニアエンジニア
〃	山本 博司	(株)山武	AAC IP マーケティング部バルブ&ポジショナーGr. 調節弁担当プロダクトマネジャー
〃	吉原 豊	(株)フジキン	新製品開発部調査・知財 Gr. リーダー

国際委員会

委員長	河合 真	(株)山武	取締役執行役員常務
委員	阿部 高士	(株)フジキン	執行役員
〃	増尾 宏之	(株)キッツ	アジア中東営業部 部長
〃	佐藤 精一	(株)オーケーエム	取締役国際統括本部 本部長
〃	堀田 龍司	日立バルブ(株)	生産管理センター長
〃	青山 文明	金子産業(株)	技術部 部長
〃	内澤 修	(株)本山製作所	PM 室 室長
〃	山本 博司	(株)山武	AAC IP マーケティング部バルブ&ポジショナーGr. .調節弁担当プロダクトマネジャー
〃	夏目 和典	(株)三栄水栓製作所	常務取締役製造本部長
〃	松崎 寿広	前澤給装工業(株)	営業技術部長
〃	広中 賢	(株)昌立製作所	取締役営業部長

広報委員会

委員長	中北 健一	(株)中北製作所	代表取締役社長
副委員長	奥津 良之	(株)山武	AAC 営業技術部 FI/CV Gr. シニアマネジャー
委員	三橋 一功	(株)フジキン	取締役 CS マーケティング本部長
〃	松尾 誠吉	松尾バルブ工業(株)	代表取締役社長
〃	田中 弘之	(株)キッツ	大阪エンジニアリング Gr. 副技師
〃	野口 敬二	(株)ミヤワキ	取締役相談役
〃	齋藤 省律	(株)ベン	技術部開発プロジェクト
〃	山田 徹	日本フィツシヤ(株)	オーダーマネージメント部営業業務 Gr. マネージャー
〃	小川 隆	(株)KVK	品質保証室長
〃	大江 裕明	(株)日邦バルブ	専務取締役営業本部長
〃	青山 文明	金子産業(株)	技術部 部長
関係者	中村 浩一	(株)フジキン	CS マーケティング本部 AMG

5-3. 第3計画(平成26~28年度)

敬称略・順不同、社名等は平成26年3月当時のもの。

ビジョン委員会

委員長	中村 善典	金子産業(株)	代表取締役社長
委員	岡安 直人	岡バルブ製造(株)	代表取締役社長

ビジョン委員会(続き)

委員	横山 達也	東工・バレックス(株)	代表取締役社長
"	藤島 建夫	フシマン(株)	代表取締役社長
"	落合 潔	兼工業(株)	代表取締役社長
"	前田 康雄	前田バルブ工業(株)	代表取締役社長
"	村井 米男	(株)オーケーエム	代表取締役会長
"	濱口 浩一	宮部鉄工(株)	代表取締役社長
"	中村 政弘	オーエヌ工業(株)	代表取締役社長
"	西岡 利明	(株)三栄水栓製作所	代表取締役社長

技術委員会

リーダー	真田寿美夫	(株)キッツ	バルブ事業部技術本部 主席技師
委員	浅井 修	(株)キッツ	バルブ事業部技術本部 技術部長
"	大塚 一弘	(株)昌立製作所	技術部 部長
"	馬部 朋樹	(株)クボタ	パイプシステム事業部 バルブ技術部 部長
"	階元 鳴彰	(株)光明製作所	技術部 部長
"	佐藤 俊雄	岡野バルブ製造(株)	取締役 技術統括部長
"	鈴木 弘一	(株)ベン	取締役 技術部長
"	岡本 雅克	(株)テイエルブイ	取締役 生産本部 ジェネラルマネージャー
"	奥津 良之	アズビル(株)	AAC 営業技術部 FS1 Gr. シニアマネージャー / 主管技師
"	砥川 裕行	TOTO(株)	機器水栓技術部機器水栓評価技術 Gr. グループリーダー

技術委員会環境 WG

主査	浅井 修	(株)キッツ	バルブ事業部技術本部 技術部長
委員	石黒 文康	(株)LIXIL	プロダクツカンパニー 技術研究本部 常滑研究所 材料技術開発室 主幹
"	桶川 智也	(株)タブチ	管理本部 RD 部コスト課課長代理兼 RD エット課長代理
"	砥川 裕行	TOTO(株)	機器水栓技術部機器水栓評価技術 Gr. グループリーダー
"	中島 一彰	(株)三栄水栓製作所	岐阜工場 技術課 課長
"	小林 一穂	東洋バルブ(株)	営業技術部 部長
"	樋口 敏夫	日立バルブ(株)	開発センター 主任技師
"	福本 丈登	(株)テイエルブイ	生産本部付 製造技術担当シニアエンジニア
"	古谷 元洋	アズビル(株)	バルブ商品開発部 開発 1 Gr. 課長代理
"	吉原 豊	(株)フジキン	新製品開発部 調査・知財 Gr. グループリーダー

国際委員会

委員長	河合 真	アズビル(株)	取締役 執行役員常務
委員	クルマゾフ ワシリー	(株)フジキン	うりづくり(営業)部門国際事業部ロシア担当主位
"	近藤 敦	(株)フジキン	執行役員
"	矢島 穰司	(株)キッツ	営業本部 海外営業推進部長
"	佐藤 精一	(株)オーケーエム	常務取締役 営業統括本部長
"	蛭川 孝	日立バルブ(株)	生産管理部 部長

国際委員会(続き)

委員	布川 直樹	金子産業(株)	平塚工場 取締役 工場長
"	日高 建生	(株)本山製作所	営業本部 事業企画部 部長
"	山本 博司	アズビル(株)	AACマーケティング部アクティビタ Gr. 課長代理
"	夏目 和典	(株)三栄水栓製作所	岐阜工場 専務取締役
"	松崎 寿広	前澤給装工業(株)	営業本部 営業技術部長
"	広中 賢	(株)昌立製作所	執行役員 営業部長

広報委員会

委員長	中川 哲	(株)昭和バルブ製作所	代表取締役社長
副委員長	奥津 良之	アズビル(株)	AAC 営業技術部 FS1 Gr. シニアマネージャー / 主管技師
委員	三橋 一功	(株)フジキン	常務取締役 うりづくり(営業)部門担当 総本部長
"	中村 浩一	(株)フジキン	うりづくり(営業)部門総本部 CS・マーケティング本部 AMG
"	松尾 誠吉	松尾バルブ工業(株)	代表取締役社長
"	田中 弘之	(株)キッツ	技術本部 技術管理部 標準化推進 Gr. 副技師
"	野口 敬二	(株)ミヤワキ	取締役相談役
"	齋藤 省律	(株)ベン	技術部開発プロジェクト
"	大石 秀晴	(株)大和バルブ	東日本ブロック 東京支店 執行役員 支店長
"	小川 隆	(株)KVK	品質保証室長
"	大江 裕明	(株)日邦バルブ	専務取締役 技術本部長
"	石井 哲也	金子産業(株)	平塚工場 取締役 品質保証部 部長

以上

バルブ産業ビジョン

- 日本ブランドの恒久的な地位確立を目指して -
完了報告

平成 29 年 3 月 31 日発行

一般社団法人日本バルブ工業会

<http://www.j-valve.or.jp/>
〒105-0011 東京都港区芝公園 3-5-8 機械振興会館
TEL : 03-3434-1811 FAX : 03-3436-4335
E-mail: info@j-valve.or.jp